

日月山荘のおかみさん

岩田温子

日月山荘は四姑娘山域の玄関口である日隆（リーロン）にある小さなホテルの名前です。

わんりいの仲間達が四姑娘山自然保護管理局の特別顧問の大川さんのご紹介でこの地域に足を運ぶようになってから3年、毎回このホテルに泊まるのでよくご存知の方も少なくないと思います。今年の8月にはフラワーウォッチングと大姑娘山登山を目的に私を含めた9人が訪れ、宿泊しました。

日月山荘の2階、食堂に当てられた部屋の前に中庭のような空間があります。食事時間が近くなった私たちはその中庭でぶらぶらし、周りの建物の様子を見回しながら食事を待っていました。すると、中庭の奥まったところの壁際に据え付けられた棚の上に、なにやら茶色い、毛のようなものが籠に入れられておかれているのに気がつきました。近寄ってみると、やはり動物の毛です。そのとき通りかかったおかみさん（サスマンさん）に「ヤクの毛ですか？」と聞いてみると、そのとおりでした。

おかみさんは私たちがヤクの毛を興味深そうにしげしげと見ていると、近寄ってきて、ヤクの毛を取り、身振り手振りを交え「硬い毛は敷物に、柔らかい毛は衣服用にする」と教えてくれました（写真1）。毛の入った籠の側には敷物用と思われ

る、ごわごわした手触りのこげ茶色の織布が畳んでおいてありました。毛は細い竹を裂いて編んだ籠状の容器に入れ、そこから少しずつ引っ張り出しながら、糸に紡いで紡垂車に巻きつけます（写真2）。

私たちが道具や敷物に触れながらますます興味深そうにしていると、わざわざ家の中からヤクの毛織布で



写真 1

仕立てた服を取り出してきて見せてくれました。それはご主人とおかみさんのハレの日に着るための服だそうで、おかみさんが織り、仕立てたものだそうです。金や銀のラメの入った飾り布が襟から裾、袖口に縫い付けられた、たっぴりとした立派な服です。（写真3, 4）。色はやはりこげ茶で、さすがに敷物用よりは織り目が細かくて、しっかりと織られていましたが、結構重たく、手触りも少しチクチクしていました。



写真 2

さらにおかみさんは部屋の中からまだハサミを入っていない布地を出してきて、「これで息子達の晴れ着を作るのだ」と話してくれました。そのときのおかみさんの誇らしげな顔。自分のやっていることに確かな自信を持っている美しい笑顔でした。織機も出してくれましたが、忙しいらしく、広げて見せてもらうことは出来ませんでした（写真5）。

ヤクはチベット高原に生息している牛の仲間で、長くてふさふさした毛を持っています。かつてはその丈夫な毛で衣類、敷物、穀物保存用の袋、物資運搬用の袋などおよそ生活に必要な繊維製品を作っていたそうですが、今はあらゆる点で

便利な化学繊維製品が好まれるようになって、もうヤクの毛を刈り取って、糸に紡ぎ、織って、仕立てるといふ人はすくなくなつたそうです。日月山荘の近くに住んでいるおばあさんが家の前でヤクの毛を紡いでいましたが、そのおばあさんも「若い人たちはもうやらない。私みたいな年寄りばかりよ」と寂しそうに言っていました。



写真 3



写真 4

日月山荘のおかみさんの年齢は恐らく40代前半ではないかと想像しています。毛は買入れたと言っていました。家事の他に、ホテルや土産物屋の仕事などで忙しいであろう人が、わざわざ毛を買って、手のかかる仕事をしていることに、そしてその仕事を大切な誇らしいこととして考えていることに、私はとても感動をしました。

おかみさんの長男(明銘さん)は、私たちの登山ガイドをしてくれた青年で、今年の9月から日本の大学へ4年間の留学をするために来日しました。次男は流暢な英語を話していましたから、いつかは英語圏へ留学を考えているのかもしれませんが。この青年達が普段どんな服を着て、どんな暮らし方をするとしても、ハレの日にはお母さんの、まさに手づくりの、少々重たい、少々チクチクする晴れ着を誇りを持って着てくれたらと願わずに入られませんでした。

*写真撮影は奥村千恵子さん、加奈子さんによるものです。

→ 写真 5

